野芥大藪2

－野芥大藪遺跡第２次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1085集

２０１０

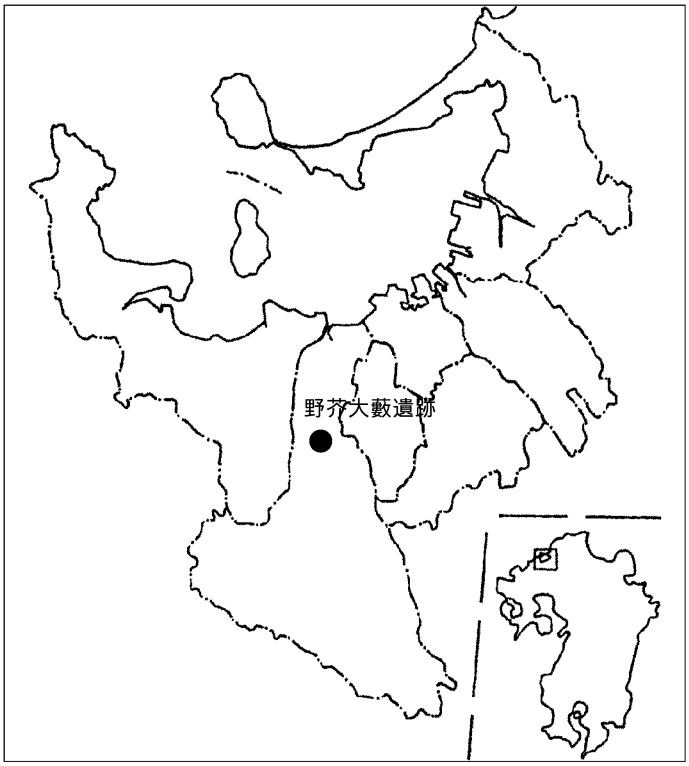
福岡市教育委員会

NO　KE　OO　YABU

野芥大藪2

－野芥大藪遺跡第２次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1085集



調査番号　０８０４
調査略号　NKO-2

２０１０

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。本市では市内で行われる諸開発によって、やむなく失われる遺跡を記録として後世に残すための発掘調査を行っています。

今回報告する野芥大藪遺跡は、早良区賀茂二丁目から野芥二丁目地区に所在する遺跡で、平成5年から6年にかけて行われた外環状道路建設に伴う調査が最初で、今回の市営田隈第1団地建替えに伴って行われた調査が二次目の調査となります。

調査では第一次調査から続く縄文時代頃の川跡や、古代条里制の地割に沿った溝などを検出しました。本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査とその整理・報告に際しましては、委託者の住宅都市局市営住宅部建替改善課をはじめとして、関係各位、地元の皆様のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長　山 田　裕 嗣

凡　例

(1)　本書は、福岡市教育委員会が市営田隈第一団地建替えに伴い、福岡市早良区賀茂二丁目100-1外1筆で平成20(2008)年度に調査を実施した野芥大藪遺跡第2次調査の報告書である。
(2)　発掘調査は上記の主体により行われ、調査は山崎龍雄が担当して行った。
(3)　遺構・遺物の実測と写真撮影は山崎が行った。
(4)　遺構記号については溝・川跡→SD、ピット→SP、不明・その他の遺構→SXとしている。
(5)　本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
(6)　遺構全体写真撮影と国土座標測量については、写測エンジニアリング株式会社に委託して行った。
(7)　本書に使用した方位は磁北であり、真北とは6°18′西偏する。本書に使用した座標は旧日本測地系である。
(8)　本書Fig.1の調査区位置図は平成６年３月作成の『福岡市文化財分布地図 西部Ⅰ』を使用した。
(9)　本調査出土の土壌や木質遺物など自然遺物の分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
(10)　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
(11)　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
(12)　本書の執筆・編集は山崎が行った。

調査基本情報

遺　跡　名	野芥大藪遺跡	調　査　次　数	2次	調　査　略　号	NKO－2
調　査　番　号	0804	分布地図図幅名	No.83　野芥	遺跡登録番号	2448
申請地面積	2,035㎡	調査対象面積	500.00㎡	調　査　面　積	546.70㎡
調　査　期　間	平成20（2008）年4月10日～6月6日			事前審査番号	19－1－113
調　査　地	福岡市早良区賀茂二丁目100－1外1筆				

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 3
１　調査に至る経緯 …… 3
２　調査の組織 …… 3
第２章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 4
１　遺跡の立地 …… 4
２　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の記録 …… 6
１　調査の概要 …… 6
２　第1面の調査 …… 7
　① 溝状遺構 …… 7
　② 遺構面出土遺物 …… 11
３　第2面の調査 …… 11
４　野芥大藪遺跡第2次発掘調査における自然科学分析 …… 12
５　まとめ …… 22

挿　図　目　次

Fig.1　野芥大藪遺跡第2次調査区位置図（1/5,000）…… 2
Fig.2　野芥大藪遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）…… 5
Fig.3　第2次調査 調査区配置図（1/400）…… 6
Fig.4　第2次調査遺構配置図 (1/100) …… 折込み
Fig.5　SD01とその土層（1/120・1/60）…… 8
Fig.6　SD02・04・05・11とその土層（1/120・1/60）…… 9
Fig.7　各遺構出土遺物（1/3・1/1）…… 10
Fig.8　免遺跡第2次調査アカホヤ火山灰層下から出土した石器 …… 22
Fig.9　第1次調査・第2次調査遺構配置図（1/750）…… 23
Fig.10 早良平野条里図 …… 24

写　真　目　次

PL.1　野芥大藪遺跡周辺航空写真（昭和23年米軍撮影）…… 25
PL.2　(1) 野芥大藪遺跡航空写真（1994年撮影）　(2) 第1次調査Ⅰ区遺構写真 …… 26
PL.3　(1) 調査区から油山を臨む（北西から）　(2) 調査区全景（上から）…… 27
PL.4　(1) 調査区西側（上から）　(2) 調査区東側（上から）…… 28
PL.5　(1) SD01（北西から）　(2) 同　中央土層（南から）
　(3) 同　南壁土層（北から）…… 29
PL.6　(1) SD02・05・11（南から）　(2) SD02北壁土層（南から）…… 30
PL.7　(1) SD04（南から）　(2) 同　土層（南から）…… 31
PL.8　(1) SD07（北西から）　(2) 調査区中央部第2面検出状況（北東から）… 32
PL.9　(1) 調査区西壁土層(東から)　(2) 南壁土層（北から）
　(3) 発掘調査を行った人たち …… 33
PL.10 各遺構出土遺物（縮尺不統一）…… 34

自然科学分析図・表・図版目次

表1.テフラ分析結果　表2.放射性炭素年代測定結果　表3.暦年較正結果 …… 17
表4.花粉分析結果 …… 18
図1.火山ガラス屈折率 ……17
図2.SD01における花粉化石群集の層位分布…… 19
図版1.テフラ …… 20
図版2.花粉化石 …… 21

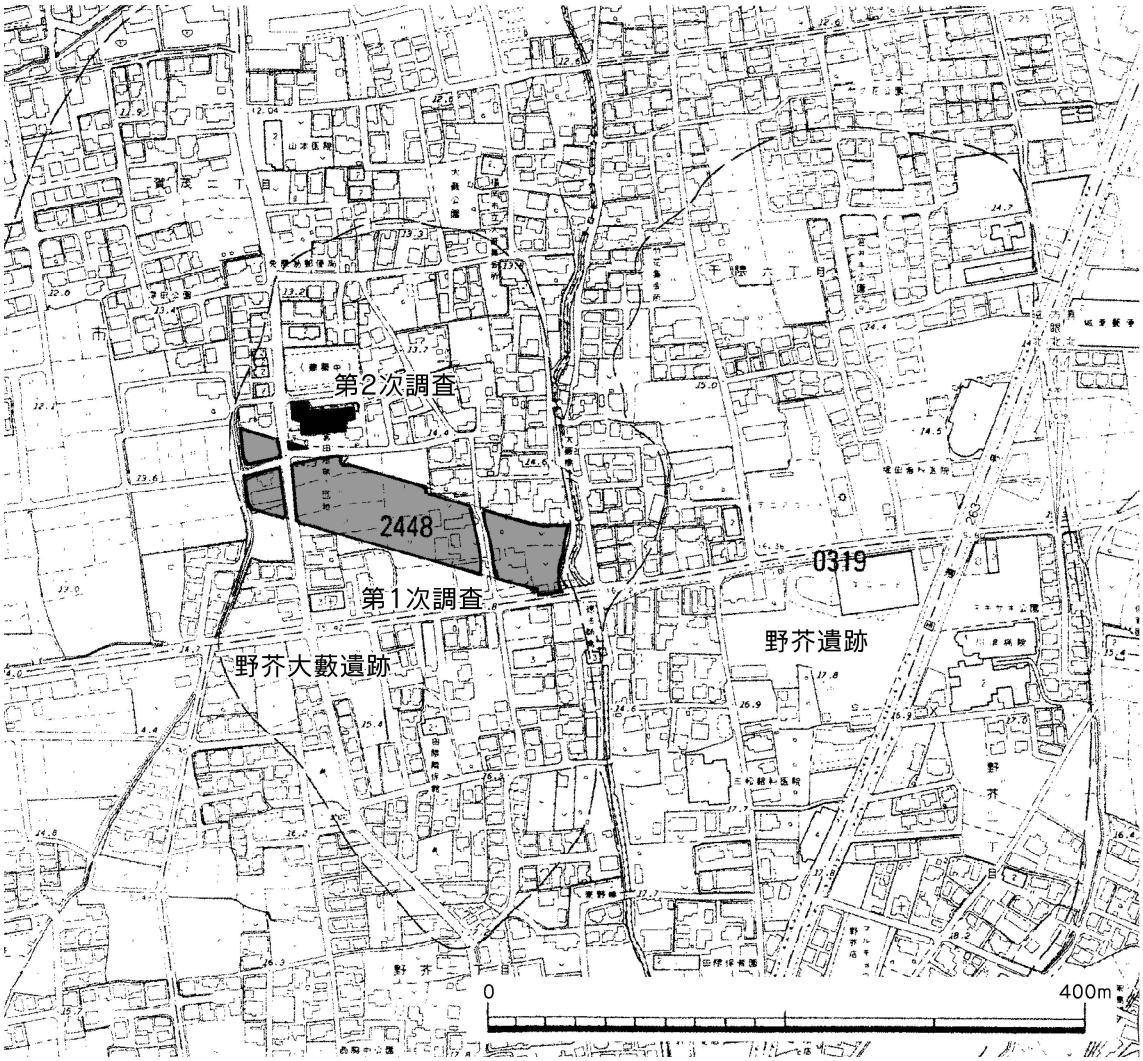


Fig.1　野芥大藪遺跡第2次調査区位置図（1/5,000）

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

福岡市は老朽化した市営住宅を順次計画的に建替えを行っている。平成19(2007)年12月28日付けで建築局住宅部建替整備課より、福岡市早良区賀茂二丁目100－1外1筆に所在する市営田隈第1団地の建替えを行うため、埋蔵文化財事前審査についての依頼（事前審査番号19－1－113）が福岡市教育委員会に申請された。申請地は野芥大藪遺跡の遺跡範囲内に立地するため、平成20年1月16日に事前試掘調査を実施して遺跡の有無を確認した。試掘調査の結果、遺跡の存在が確認され、申請者側とその取り扱いについて協議を行った。建替え工事は地元の要望であり、居住者の転居期間との兼ね合いから、新年度当初4月には工事を着工したいので、それ迄に発掘調査を終了して欲しいという希望であった。本課としては、年度末で年度内調査は困難であるということから、新年度当初に調査を行う事となった。調査対象範囲は計画工事範囲である。発掘調査にかかる諸経費は建築局から令達を受けた。

本調査は平成20年4月10日から開始し、6月6日迄行った。調査実施面積は申請面積2,035㎡中の546.7㎡である。調査報告書作成作業は平成21年度に実施した。

調査にあたっては、住宅都市局市営住宅部建替改善課、及び地元の方々に多大な協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

2．調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託　建築局住宅部建替整備課（現住宅都市局市営住宅部建替改善課）
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課
調査総括　文化財部埋蔵文化財第2課長　田中寿夫
埋蔵文化財第2課調査第1係長　杉山富雄
調査庶務　文化財管理課管理係　古賀とも子
試掘調査担当　埋蔵文化財第1課事前審査係　星野恵美
調査担当　埋蔵文化財第2課主任文化財主事　山崎龍雄
調査作業　浅井伸一　石井純子　井上正通　榎田信一　尾崎泰正　小田義之　川岡涼子
栗木昭孝　近藤由美　真田弘二　茂末加世子　高橋茂子　田口恵子　田中昭子
土橋一則　徳永洋二郎　中村秀策　永井ユリ子　西口キミ子　西野光子
土生ヨシ子　森下初美　森弘品子　吉田勝善　吉野一憲　脇山千代美
整理作業　井上朝美　増永好美

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地（Fig.2・10、PL.1・2）

野芥大藪遺跡は、福岡市の西南部に位置する早良平野の中央部東側、飯倉丘陵よりの地点に所在する。国土地理院の五万分の一の地図「福岡」では、上から27㎝、右から28.5㎝の地点である。

早良平野は中央を南北に貫流する室見川と、その支流や十郎川によって形成された扇状地と沖積地、海岸砂丘部から形成される平野で、西側は長垂丘陵、南側は背振山塊、東側は油山と飯倉丘陵によって限定され、その形状は博多湾に向かって扇状に展開する。本遺跡は室見川の支流金屑川の東側、標高12～16ｍを測る扇状地状を呈す低位段丘上に立地する。

2．歴史的環境

野芥大藪遺跡が立地する早良平野は旧石器時代から遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡は少ないが、平野周辺の室見川西岸河岸段丘上に立地する吉武遺跡群や平野部中央の小田部台地上の有田遺跡群が知られている。外にも周辺丘陵部にも旧石器が出土した地点が散見される。縄文時代は周辺の丘陵部、内陸部の内野から四箇、田村あたりにかけての扇状地上に早期から晩期にかけての遺跡が立地する。特に内陸部の旧早良町地区には古い時期の遺跡が分布している。晩期末になると下流の有田、福重あたりまで遺跡は広がる。

弥生時代は稲作農耕の定着という生業形態の変化から、遺跡は下流低地部から海岸砂丘産まで広がる。有田遺跡群では前期の環壕集落が早良平野で出現する。室見川中流西岸の吉武遺跡では、弥生時代前期末から中期にかけて、1000基を超える多数の甕棺墓群とともに、銅剣などの副葬品を持つ多数の墓が確認されており、弥生時代のクニの王墓と考えられている。早良平野部にはこの吉武遺跡以外に有田遺跡群や飯倉遺跡、東入部遺跡など拠点集落が数カ所存在している。野芥大藪遺跡西側の免遺跡では旧金屑川の川跡内に構築された水利施設の堰が調査されている。

古墳時代の遺跡は前時代と同様に分布する。海岸砂丘部の藤崎遺跡では方形周溝墓が調査され、三角縁神獣鏡が出土し、また隣接する西新町遺跡では集落が調査され多数の朝鮮半島系の土器が出土している。海岸部の五島古墳では前期の古墳が調査されている。前方後円墳は拝塚古墳や樋渡古墳、梅林古墳、羽根戸南古墳群で3基が知られているだけである。後期になると群集墳が西側の長垂・飯盛山山麓や、東側の油山山麓に多数分布している。

古代は早良郡であり、早良には7郷あったことが知られ、当遺跡は野芥郷内に位置する。周辺には「三十田」、「池ノ上」などの条里制に伴う地名が残り、都市化が進む前は、水田、道路などに条里地割跡が良好に残っていた。また有田遺跡群では早良郡衙跡と思われる大型建物群や、飯盛山裾南側の金武・都地地区では性格は不明だが大型建物群が検出されている。

中世は野芥荘の一部であり、南西側の田村遺跡や西側の次郎丸遺跡、北側の原遺跡、南側の清末遺跡などで平安時代末から鎌倉時代にかけての集落が調査されている。これらの集落は微高地上に立地する。清末遺跡は豪族の館跡と考えられる堀と建物群が検出されている。平野周辺西側の飯盛山山頂には飯盛山城、東側の荒平山山頂には安楽平城と、山麓部には出城の茶臼城、兎道嶽城が築かれる。

1 **野芥大藪遺跡**	4 次郎丸高石遺跡	7 四箇遺跡	10 四箇東遺跡	13 原東遺跡	16 西油山古墳群
2 野芥遺跡	5 田村遺跡	8 重留遺跡	11 有田遺跡群	14 飯倉遺跡群	17 重留古墳群
3 免遺跡	6 クエゾノ遺跡	9 重留村下遺跡	12 原遺跡	15 駄ガ原古墳群	

Fig.2　野芥大藪遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）

第3章　調査の記録

1. 調査の概要（Fig.1・3・4、PL.3・4・9）

調査地は早良区賀茂2丁目地内に所在する。調査地南側の外環状道路は第1次調査部分で、今回の調査地はそのⅠ区西側の北に位置する。調査は建物予定範囲について行った。標高は現地表面で14.2～14.5mを測る。遺構面までの基本層序は、真砂土盛土（客土）、青灰色土（水田耕作土）、暗灰黄色土（水田床土）、黒褐色砂質土又は黒褐色砂混り粘土（遺構面）、暗灰オリーブ粘土（粗砂混じり）の基盤土となる。遺構面は地表下1.3～1.5mの深さで検出した。調査前は中層のRC造のアパートが建っていたので、遺構面には建物基礎杭などが多く残り、それらを一部撤去しながら、調査を行った。

検出遺構は上面の第1面で縄文時代頃の川跡2条、溝条遺構6条、ピットなどである。ピット埋土は黒色粘質土が多く、遺構面の土色に近く分かりづらかった。ピットから遺物の出土はない。柱穴など人為的なものではないと考える。検出した遺構は基盤土の上層の面で検出したため、更に0.2～0.3m程掘り下げ遺構の再確認を行い、アカホヤ火山灰を含む自然流路1条を検出した（第2面）。検出遺構の密度としてはそれ程多くなく、遺物の出土量も多くなかった。

第1次調査の概要

調査原因　外環状道路建設に伴う調査

調査期間　平成5（1994）年5月18日～平成6年6月27日

調査面積　8,750㎡

検出遺構　縄文時代の川跡、古墳時代の土坑群、古代の水路跡1条と堰、中世の溝、江戸時代の溝、土坑群、井戸、建物などである。

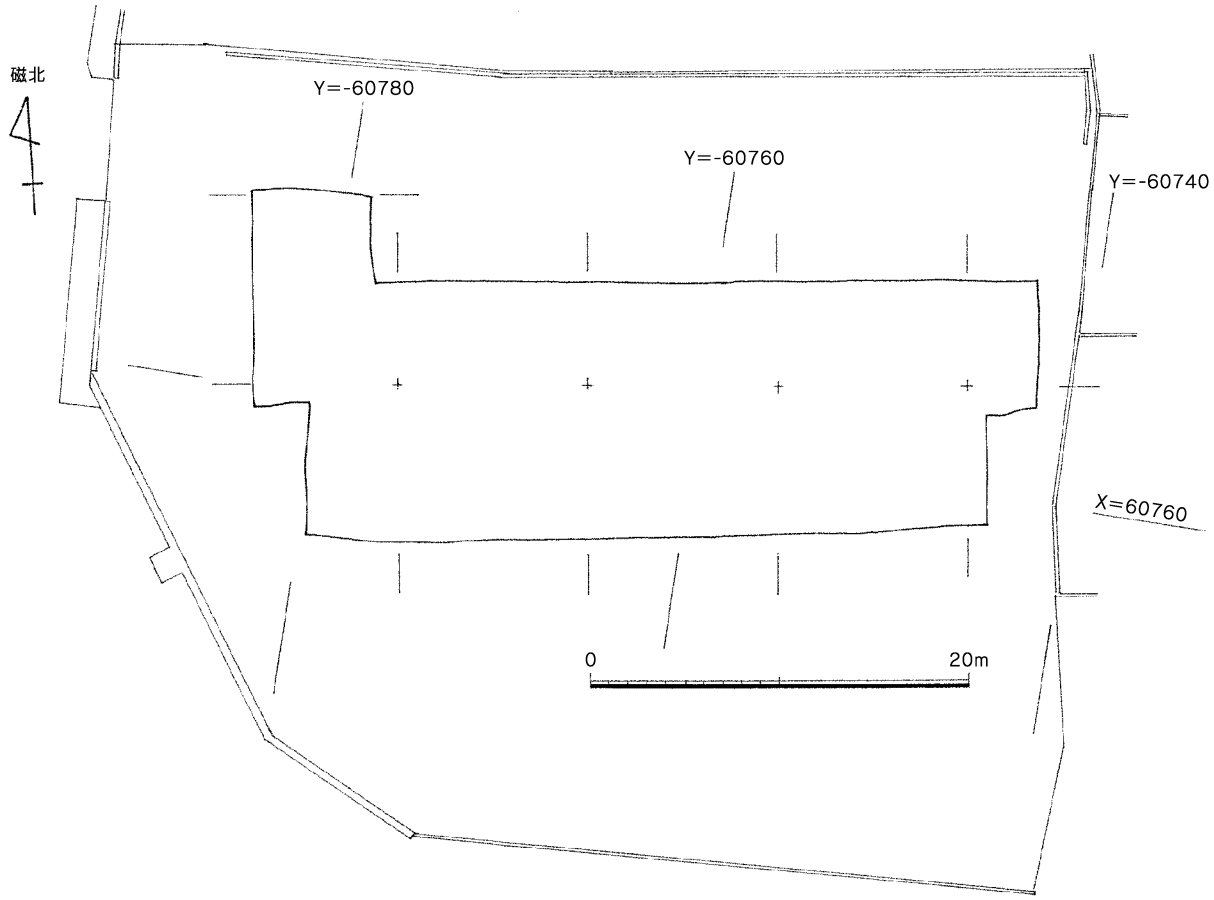


Fig.3　第2次調査 調査区配置図（1/400）　※ 座標値は旧日本測地系の数値

Fig.4　第2次調査遺構配置図（1/100）

2. 第1面の調査

① 溝状遺構

SD01（Fig.5、PL.5）

調査区西側で検出した南東から北西方向に蛇行する川跡。調査区間に間隔があり、また蛇行しているため、確実ではないが第1次調査区のSD149・SD150に繋がる遺構の可能性がある。確認規模は2.5～3.5m、深さは1.2m前後を測る。川幅、深さは水の流れによって浸食を受けているのか、一定していない。川底も凹凸が激しい。堆積土は西・南、中間の各土層によれば、灰オリーブ、もしくは灰白色粘土の薄い層を挟む黒褐色・黒色粘土が自然に堆積する部分（新期）と、粗砂に黒色粘土ブロックを含む不規則な堆積部分（古期）に大きく分けることが出来る。これは2回の川の流れの状況を示している。古期は洪水など激しく水が流れ粗砂が堆積した状況。新期は川道が変化し水の流れが止まり、自然に埋没した状況を示すものと考える。下層黒色粘土出土流木の放射性炭素の年代測定を行った結果では、3,180±30BPで、暦年較正結果によれば暦年代はcalBC1,493-1,422という結果が出ており、縄文時代後期末から晩期前半以降の川跡の可能性がある。

出土遺物　時期不明の土器細片が僅かに数点出土したのみで、時期を比定する遺物はなかった。

SD02・05・06（Fig.6・7、PL.6・10）

SD02・05は調査区中央部で検出した川跡。南壁から左に「く」字状にカーブして延びるSD05は北側のSD02に繋がる。SD02とSD05の間には楕円形の溜まり状の落込みがある。川の規模は北壁で6m、SD02部分で3m、深さはSD02で2.0～2.1m、SD05で0.4～0.9m、溜まり部分で2mを測る。SD02が幅広であるのは度々水の流れが変わったことによるものと思われる。そのためか川底は凹凸が激しい。また砂礫層まで川底が達していたせいか、湧水があった。SD02の埋土状況は北壁が崩落の危険があり、図化出来なかったが、メモではSD02部分で上層は暗褐色粘土や褐色粗砂、中層は黒色粘土と褐色～暗褐色粗砂の互層、下層は灰黄褐色粗砂となる。中・下部壁面は抉れており、川底には壁ブロックが崩落していた。中下層から流木が少量出土している。SD05の北層は黒色粘土や粗砂などの薄層が何層も重なりあった複雑な状況を示す。これはその北側にある溜まり状遺構に水が絶えず流れ込んでいたため、堆積状況を示しているのであろう。南層はそれに比べ単純で上層は黄褐色粗砂で薄い黒色粘土層を水平に挟み、下層は黒色粘土と暗灰黄色粘質砂の混合となり、底面には酸化鉄分が付着し黄味を帯びる。溜まり部分は壁の崩落があったのか、壁面が抉れており、下層には壁崩落土が落込んでいた。

SD06はSD02南東側で検出した古い自然流路。完掘していないが、暗黄褐色から黄褐色粗砂が堆積した部分が帯状に蛇行しながら南に延びていたので、自然流路と考えた。溝幅は1.15～1.45mで、一部調査した部分で1.3m程である。その部分を見る限り埋土は砂のみで粘土は挟んでいなかった。

SD02出土遺物　縄文土器の細片などが上層から中層の粗砂層から少量出土している。明確に時期を決めうる遺物はない。**1**・**2**は縄文土器。**1**は晩期前半の黒川式土器直前頃と思われる精製の浅鉢土器。口縁部細片である。口縁部外面に沈線、内面に段が付く。外面の調整はヨコナデか。**2**は鉢胴屈曲部細片。器壁は摩滅し調整は不明。色調は、**1**は鈍い黄褐色、**2**は鈍い黄橙色を呈す。胎土は**1**は白色微砂粒を多く含み、**2**は1㎜内外白色砂粒と金雲母粒子を多く含む。焼成は**1**は良好。

SD05・06出土遺物　SD05は縄文土器の図示出来ない細片が2点出土。SD06は遺物の出土はない。

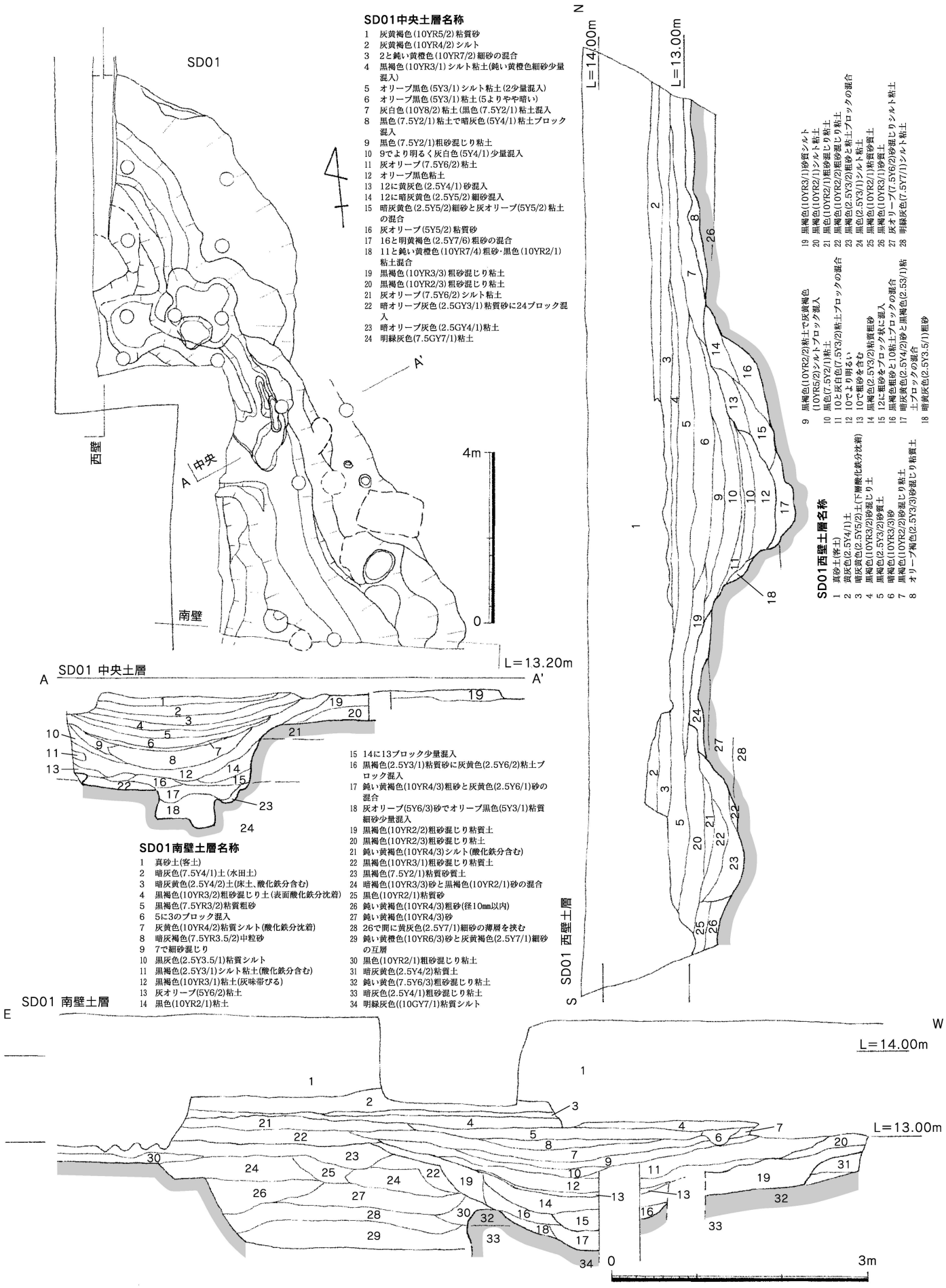


Fig.5 SD01とその土層（1/120・1/60）

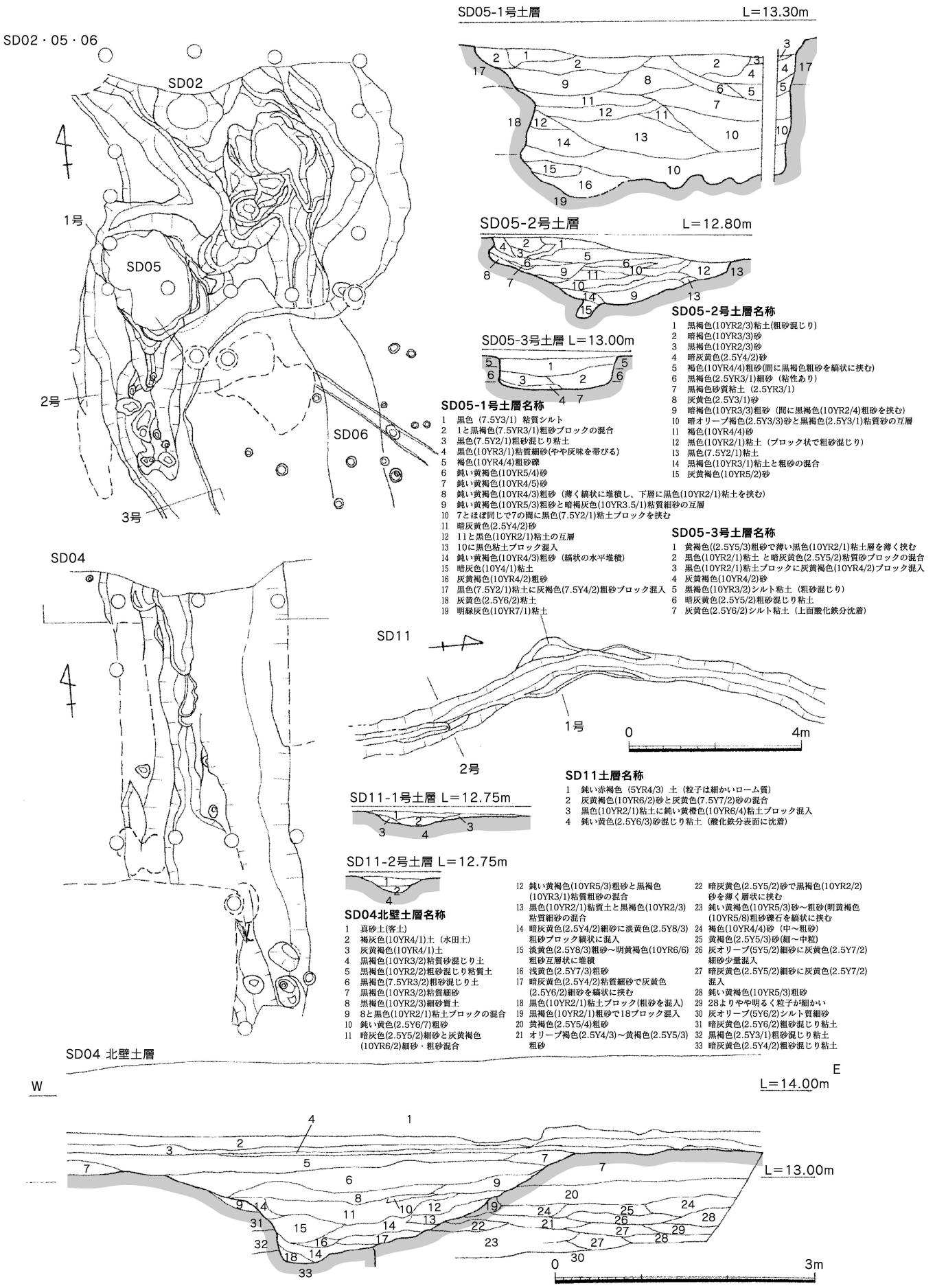


Fig.6 SD02・04～06・11とその土層（1/120・1/60）

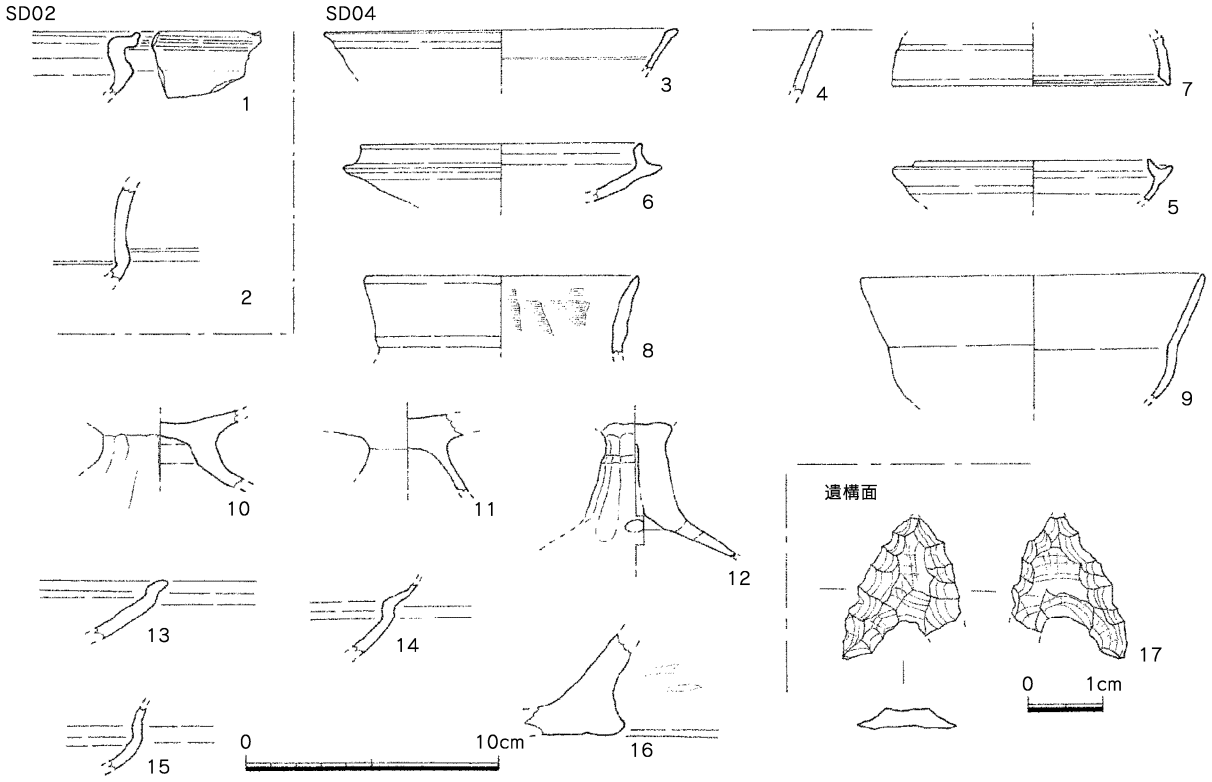


Fig.7　各遺構出土遺物（1/3・1/1）

SD04（Fig.6・7、PL.7・10）

調査区東側で検出した南北方向の大溝。南側は建物攪乱がかかる。確認規模は長さ11m、溝幅は北壁土層で4.75m、深さは1.25mを測る。この溝は第1次調査で検出した古代の溝SD019からほぼ直線的に続くものであり、その確認長は約100mに及ぶ。溝埋土は上層が黒褐色粗砂混じり土や粘土が主体、中～下層は暗灰色・灰黄褐色細砂や粗砂などが主体となる。下層には流木が含まれ、常時水が流れていた状況を示す。底からは絶えず湧水があった。第1次調査区では北側に水利施設の堰が検出されており、この溝周辺に水田が営まれていたのであろう。溝の方向は、古代早良郡の条里地割に沿うものである。

SD04出土遺物　縄文土器、弥生土器、古墳時代から古代の土師器・須恵器、上層から中世白磁などと黒曜石の剥片が出土している。量はそれほど多くない。**3**は大宰府編年白磁碗Ⅴ-4類の口縁部小片。12世紀中頃～後半のもの。**4**～**7**は須恵器。**4**は坏口縁部片。細片で全体の形状は不明だが、8世紀以降のものであろう。**5**・**6**は坏身。**5**は口縁部の立上がりが内傾する小田富士雄氏編年のⅣB期のもの。復元口径9.2cmを測る。調整は口縁部から内面は回転ヨコナデ、外底部はヘラケズリ。**6**は**5**より古い時期のⅣA期のもの。復元口径11.0cmを測る。調整は回転ヨコナデ。**7**は坏蓋小片。古手の形態で、口縁内面は斜めで段を有し、また外面口縁と天井部の境にも軽い段を有す。色調は**4**が灰黄褐色、**5**～**7**は灰色。胎土は**4**が精良。他は微砂粒を含む。**8**～**12**は土師器。**8**は6世紀代の甕口縁部。復元口径10.8cmを測る。口縁部外面ヨコナデ、内面はヨコナデでヨコハケ目が残る。**9**は古墳時代前期前半の鉢か丸底壺。体部から口縁がくびれて外へ開く形態。復元口径13.6cmを測る。調整は器壁の摩滅がひどく不明。色調は**8**はオリーブ褐色、**9**は鈍い黄橙色を呈す。胎土はいずれも1～2mm内外砂粒多く含む。**8**の焼成は良好。**10**～**12**は高坏脚部。**10**は8世紀前半～中頃のもの。器壁はやや摩滅し明瞭

ではない、ナデで脚外面はケズリを加える。**11**の器壁は摩滅するがナデ。**12**は6世紀のもの。器壁は内面摩滅するが、外面はタテヘラケズリ。色調は、**10**・**12**は鈍い黄橙色、**11**は鈍い赤褐色を呈す。**13**～**16**は縄文土器。**13**・**14**は浅鉢の口縁部。縄文時代晩期の黒川式か。**15**は胴屈曲部片。3点とも摩滅がひどく調整は不明。**16**は深鉢の底部片。胴部外面は条痕、内面はナデ。色調は**13**は鈍い黄橙色、**14**は黄灰色、**15**は灰黄褐色、**16**は鈍い黄褐色を呈す。いずれも砂粒を多く含む。**3**は上層、**16**は中層、**4**～**15**は下層出土。

SD07（PL.8）

調査区中央部、北西から南東方向に直線的に延びる溝。間にSD05を挟み、切れ切れに続く。確認長16m、幅0.6mを測る。深さは3cmほどで浅く、残りは悪い。埋土は暗褐色から黒褐色粗砂。

出土遺物はなかった。

② 遺構面出土遺物（Fig.7、PL.10）

17は遺構面粗砂中出土の黒曜石石鏃。基部は凹基で、先端や基部の一部は欠損する。剥片の縁辺に調整を加え成形している。鏃長1.9cm、幅1.6cm、最大厚0.2cm、重さ0.5gを測る。

3. 第2面の調査（Fig.4、PL.8）

基盤土面で検出した遺構である。溝1条、少数のピットを検出したが、ピットは上面からの掘り残しと思われる。

SD11（Fig.6、PL.6）

調査区中央部で検出した。西に湾曲して延びる南北方向の溝。溝幅は0.75～1.2m、深さは最大で0.2mで浅い。埋土は上層が鈍い赤褐色土で粒子が細かく、下層は砂層である。上層の微粒子の赤褐色土は土壌分析を行った結果アカホヤ火山灰であることが判明した。火山灰が溝に流れ込んだものと考える。　**出土遺物**はなかった。

4. 野芥大藪遺跡第2次発掘調査における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

福岡市早良区野芥大藪遺跡は、福岡平野西部を流れる室見川の支流の金屑川によって形成された扇状地上に立地する。下山（1998）による地形分類および第四紀地質区分に従えば、前期更新世に堆積した仲原礫層によって構成されている春日面に対比されると考えられる。

今回の発掘調査では、縄文時代晩期頃と考えられている川跡や古代（奈良時代以降）と考えられている溝跡などの遺構が検出されており、これらの遺構からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、石器類などの遺物が出土している。

今回の分析調査では、縄文時代とされた川跡2条について、その形成や埋積の年代に関わる資料を得ることを目的として、埋積土を対象としたテフラ分析と木材試料を対象とした放射性炭素年代測定および花粉分析を行う。また埋積土を対象に花粉分析を行い、遺跡周辺の古植生についても検証する。

1. 試料

試料は、調査区西側で検出された縄文時代の川跡とされるSD01と、調査区中央付近のSD01検出面より下位で検出された縄文時代の川跡とされるSD11の埋積層より採取された。

SD01からは、2区下層の黒色粘土層（第8層）中に包含されていた流木1点が採取され、これを放射性炭素年代測定試料とした。また、南壁の埋積層断面からは、花粉分析用の土壌試料6点（試料番号1～6）が採取された。試料番号1～3は、埋積層中部の第4、5、6の各層よりそれぞれ採取され、試料番号4、5はその下位の第8層の上部と下部、試料番号6はさらに下位の埋積層の第12層からそれぞれ採取されている。各層とも、概ね黒色を呈するシルト質粘土から構成されている。

SD11からは、ベルト1とベルト2の各断面で確認された埋積層上部の第1層よりテフラ分析用の土壌試料のサンプル1とサンプル2が採取され、南壁の断面からも第１層よりサンプル3が採取された。3点ともに、黒褐～暗褐色を呈する砂質シルトである。

2. 分析方法

(1) テフラの検出同定・屈折率測定

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山 ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平 板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡 を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(2) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年代は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 結果

(1) テフラの検出同定・屈折率測定

結果を表1に示す。SD11のサンプル1およびサンプル2は、ともに火山ガラスを多量に含み、他に微量の花崗岩に由来すると考えられる岩石片を含む。火山ガラスは無色透明のバブル型を主体とし、少量の褐色を帯びたバブル型や無色透明の軽石型も混在する。サンプル3には中量の火山ガラスが含まれ、他に石英や長石類の鉱物片および他の試料と同様の花崗岩に由来すると考えられる岩石片が中量含まれる。サンプル3の火山ガラスの形態および色調は、他の試料と同様である。

3試料の火山ガラスの屈折率測定結果を、図1に示す。サンプル1のレンジはn1.507-1.513、サンプル2およびサンプル3のレンジはn1.507-1.512であり、モードはサンプル1とサンプル3はn1.509-1.510、サンプル2はn1.508-1.509であった。

上述した観察結果および屈折率測定結果より、3試料に多量または中量含まれる火山ガラスは、九州南方の鬼界カルデラを給源とする鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah:町田・新井,1978）に由来すると判断される。K-Ahの噴出年代については、町田・新井（1978）以来、放射性炭素年代である6300年前という年代が広く知られている。
しかし最近では、第四紀学および考古学において放射性炭素年代をそのまま使用するのではなく、それを「換算」した暦年代が使用されることが多い。また、福沢（1995）により湖成層の年縞堆積物中におけるK-Ahの確認からもその暦年代が推定されている。これらのことから、K-Ahの噴出年代については暦年代である7300年前という年代が表示されるようになってきている（例えば町田・新井(2003）など)。

(2)放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を、表2に示す。SD01流木試料の年代は、3,180±30BPを示す。
また、暦年較正結果を表3に示す。測定誤差をσとして計算させた結果、試料の暦年代はcalBC1,493-1,422である。

(3)花粉分析

結果を表4、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。SD01埋積土試料はいずれも花粉化石が検出されるものの、全体的に保存状態は良好といえず、特に上位の試料は花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められ、シダ類胞子も多産する傾向が認められる。また、分析残渣中には、微細な植物片が多量に含まれていた。

群集組成についてみると、試料番号6-4の木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、モミ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、ブドウ属等を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属、キク亜科等が多く認められる。

試料番号3になると、マツ属の割合が増加し、下位層で多産していたアカガシ亜属の割合が減少する。その他ではモミ属、コナラ亜属等を伴う。草本花粉ではカヤツリグサ科が最も多く産出し、イネ科、ヨモギ属、キク亜科等が随伴する。ただし、下位層と比較すると花粉化石の保存状態はやや悪くなる。

試料番号2、1では花粉化石の保存状態がさらに悪くなり、産出個体数・種類数も下位層準と比較して少なくなる。木本花粉ではマツ属が多産し、次いでモミ属、アカガシ亜属等が多く認められる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科等が産出する。また試料番号2からは、栽培種であるソバ属の花粉化石も、わずかではあるが、められる。

層位的な変化についてみると、下位から上位に向かってアカガシ亜属が減少し、モミ属、マツ属が増加する傾向が認められる。

4.考察

(1)SD11について

今回の分析調査により、SD11の埋積物の上部には、多量のK-Ahに由来する火山ガラスが包含されていることが明らかにされた。ただし、発掘調査所見ではテフラの降下堆積物という所見はなく、また分析処理前の採取試料の観察でも土壌の様相を呈していた。したがって、SD11の埋積物上部に多量のK-Ahの火山ガラスが含まれる過程としては、SD11の埋積途上にK-Ahの降灰があり、その後埋積物の土壌化などにより攪乱を受けたか、SD11の埋積途上に周囲からK-Ahを多量に含む土壌の流入があったか、いずれかの状況が想定される。今回は採取試料の制約から、埋積物の下部（特に基底直上付近）におけるK-Ahの火山ガラスの産状が確認できないが、埋積物の上部にのみ火山ガラスが含

まれるのであれば、上記前者の由来の可能性が高いことになる。この場合、SD11の埋積層上部の堆積年代は、K-Ahの降灰年代すなわち一般的な年代観からすれば縄文時代早期末頃となる可能性があり、SD11の形成された年代はよれよりも以前となる。

これまでの発掘調査所見により、SD11は縄文時代晩期頃の可能性があるとされたSD01検出面より下位で検出されていることから、今回の分析結果はこれと調和するものと言える。ただし、その具体的時期や年代については、今後隣接地点における同様の遺構からの出土遺物の時期判定や有機物試料の年代測定の実施や、SD01検出面より下位層におけるK-Ahの産状等の確認を経て、確定されることが望まれる。

(2) SD01について

今回分析試料としたSD01埋積土における花粉化石の産出状況を見ると、いずれの試料も花粉化石の保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。検出された花粉化石の保存状態を考慮すると、得られた花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。したがって、当時の周辺植生を正確に反映していない可能性がある。ただし、下位から上位に向かって、その組成変化には一定の傾向が読み取れることから、得られた花粉化石組成はその埋積層が堆積した頃の植生を反映しているとみてよい。

分析試料が採取された埋積層の最下層にあたる第12層（試料番号6）、及びその直上の第8層（試料番号5、4）をみると、広域の植生を反映する種類ではコナラ属アカガシ亜属が多産する。随伴する種類としては、モミ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、ブドウ属等があげられる。このうちアカガシ亜属は、シイノキ属、ヤマモモ属等とともに暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素である。これらのことから、第12層や第8層が堆積したSD01の埋積初期の頃、本地域周辺ではアカガシ亜属を主体とした常緑広葉樹林が生育しており、部分的にモミ属、マツ属、スギ属等の針葉樹が存在するような植生であったと考えられる。また、林縁部等の明るい部分にはブドウ属等の藤本類もみられ、SD01の集水域などの周辺河畔にはコナラ亜属やクマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属等も生育していたと推測される。なお、調査区付近の古植生を反映する種類については、イネ科、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属等の検出が多いことから、堆積当時至近に生育していた可能性がある。これらはいずれも、開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、その他にも同様の生育環境を示す草本類が認められている。よって、当時のSD01周辺には、これらの草本類が生育する草地が存在したと推測される。

上位の第6層（試料番号3）では、第8層以深で多産したアカガシ亜属の割合が減少し、マツ属、モミ属の割合が増加する傾向が認められる。その傾向は第5層（試料番号2）、第4層（試料番号1）へ向かって、より顕著になる。マツ属は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育するほか、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。このことから、第8層堆積時に比べ上位の土層堆積時には、アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹林が減少し、二次林などのマツ属が増加した可能性が想定される。草本類については、少ないながらも下位層と同様の人里植物が検出されることから、これらの草本類が生育する草地は継続的に存在したと考えられる。

本地域における既往の花粉分析結果では、約10,000年前以降からアカガシ亜属の増加が始まり、約6,000年前にアカガシ亜属・シイノキ属を主体とする暖温帯性常緑広葉樹林が最盛期に達したとされている。また、約1,500年前以降になるとアカガシ亜属・シイノキ属が衰退し、マツ属及びイネ科

花粉が急増することが確認されている（中村・畑中,1976;黒田・畑中.1979;Hatanaka,1985;畑中ほか,1998など）。今回の分析結果で認められる花粉化石群集の層位的変化は、これらの既存の調査成果とも調和的である。すなわち、SD01の第12層および第8層の堆積年代は、約6,000年前から1,500年前までの年代範囲に相当する可能性がある。ここで、第8層から出土した流木が約3,200年前の放射性炭素年代を示したことを考慮すれば、第8層の堆積年代は流木の示す年代前後の可能性がある。したがってSD01の埋積開始年代は、当初近接地点の既往の発掘調査所見により縄文時代晩期頃とされていたが、それよりもやや古い縄文時代後期あるいはそれ以前に遡る可能性がある。

一方、第6層～第4層で認められるアカガシ亜属の減少と、マツ属、モミ属の増加については、前述のように上位層で花粉の保存状態が悪いこと、針葉樹起源の花粉やシダ類胞子の割合が高いこと等を考慮すると、堆積後の経年変化により花粉が分解・消失し、分解に強いマツ属、モミ属等が選択的に残された結果である可能性もある。さらに、埋積層の堆積後の攪乱により、上位の層位の花粉組成が下位の層へ及んだ可能性もある。これらのことから、現時点では第6層～第4層の堆積年代が、約1500年前頃であると断定することはできない。この点については、より上位の埋積層に関わる遺物の出土状況や年代測定および微化石分析などの情報を含めた検討作業が今後必要であり、それによってSD01の埋没完了年代を確定することが望まれる。

なお、第5層から栽培種であるソバ属が検出されている。よって第5層堆積時の周辺域でソバ栽培が行われていた可能性があるが、上述のように上位層からの攪乱や堆積時期の問題も残されている。

引用文献

福沢仁之,1995,天然の「時計」･「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物.第四紀研究,34,135-149.

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

Hatanaka, K.,1985,Palynological studies on the vegetational succession since the Wurm glacial age in Kyushu and adjacent areas. Jornal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University,18,29-71.

畑中健一・野井英明・岩内明子,1998,九州地方の植生史.安田　喜憲・三好教夫（編著）,図説　日本列島植生史,朝倉書店,151-161.

黒田登美雄・畑中健一,1979,花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷.花粉,13,3-8.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

三宅　尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.

中村　純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村　純・畑中健一,1976,板付遺跡の花粉分析学的研究.福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　板付　－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書　1971～1974－,福岡市教育委員会,29-42.

下山正一,1998,福岡平野の縄文海進と第四紀層.福岡平野の古環境と遺跡立地-環境としての遺跡との共存のために-.九州大学出版会,11-44.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

表1. テフラ分析結果

試料名	遺構名	地点名・層位	スコリア	火山ガラス		軽石	その他の砕屑物
			量	量	色調・形態	量	
サンプル1	SD11	ベルト1・第1層	―	＋＋＋＋	cl・bw＞br・bw	―	＋(花崗岩片)
サンプル2		ベルト2・第1層	―	＋＋＋＋	cl・bw＞br・bw	―	＋(花崗岩片)
サンプル3		南壁	―	＋＋＋	cl・bw＞br・bw	―	＋＋＋ (石英・長石・花崗岩片)

＜量＞ ＋＋＋＋:多量 ＋＋＋:中量 ＋＋:少量 ＋:微量 (+):極めて微量
＜色調＞ cl:無色透明 br:褐色
＜形態＞ bw:バブル型 md:中間型 pm:軽石型

図1. 火山ガラスの屈折率

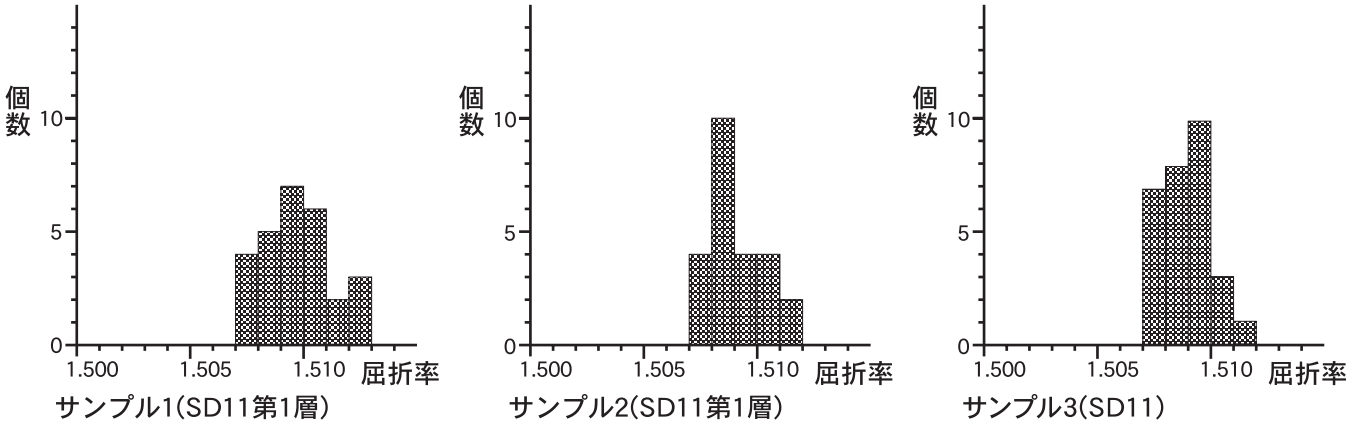


表2. 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の質	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
SD01-2区下層黒色粘土流木	木材	3,180± 30	-30.19±0.54	3,260± 30	IAAA-80772

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表3. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
SD01-2区 下層黒色粘土流木	1,329± 37	σ	cal BC 1,493 - cal BC 1,475	cal BP 3,443 - 3,425	0.284	IAAA-80772
			cal BC 1,461 - cal BC 1,422	cal BP 3,411 - 3,372	0.716	
		2σ	cal BC 1,504 - cal BC 1,406	cal BP 3,454 - 3,356	1.000	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表4. 花粉分析結果

種　類	第4層	第5層	SD01 ベルト 第6層	第8層	第8層	第12層
試料番号	1	2	3	4	5	6
木本花粉						
マキ属	2	3	3	8	−	2
モミ属	28	28	23	14	9	8
ツガ属	1	1	3	1	2	−
マツ属複維管束亜属	16	16	27	7	6	18
マツ属(不明)	74	56	80	33	11	12
スギ属	1	1	2	9	5	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	−	−	−	−	1	−
ヤマモモ属	1	1	−	2	2	1
サワグルミ属	1	−	−	−	1	−
クルミ属	−	−	−	1	1	−
クマシデ属－アサダ属	2	−	2	3	3	−
カバノキ属	−	−	1	−	1	1
ハンノキ属	−	−	1	1	1	−
ブナ属	−	−	1	4	4	2
コナラ属コナラ亜属	2	1	8	18	20	11
コナラ属アカガシ亜属	14	17	56	68	116	126
クリ属	−	−	−	1	−	2
シイノキ属	−	2	2	17	10	11
ニレ属－ケヤキ属	−	1	1	1	3	−
エノキ属－ムクノキ属	−	−	3	3	1	−
イスノキ属	−	−	−	−	3	−
キハダ属	−	−	−	1	1	−
ブドウ属	−	−	−	16	8	−
ノブドウ属	−	−	1	−	−	1
ミズキ属	−	−	2	−	−	−
イボタノキ属	−	−	1	−	−	1
草本花粉						
ガマ属	1	−	1	−	−	−
サジオモダカ属	1	−	−	−	−	−
イネ科	34	21	33	35	94	71
カヤツリグサ科	26	13	138	57	7	5
クワ科	−	−	1	−	−	−
サナエタデ節－ウナギツカミ節	11	4	3	2	3	9
ソバ属	−	1	−	−	−	−
ナデシコ科	1	−	−	−	−	−
カラマツソウ属	−	−	1	−	−	−
キンポウゲ属	−	−	1	−	−	−
ワレモコウ属	−	−	4	6	2	−
マメ科	−	−	−	29	139	61
ツリフネソウ属	−	−	−	1	−	−
ミソハギ属	−	−	1	−	−	−
セリ科	−	−	−	−	2	1
シソ科	−	−	−	−	1	4
オミナエシ属	1	−	1	1	−	−
ゴキヅル属	−	−	−	1	−	−
ヨモギ属	17	35	36	58	62	183
キク亜科	5	13	8	6	12	22
タンポポ亜科	−	1	1	1	−	−
不明花粉	9	8	9	9	16	12
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	2	3	2	−	−	1
ゼンマイ属	2	2	4	11	20	4
イノモトソウ属	24	24	16	−	−	4
他のシダ類胞子	277	282	191	227	169	131
合　計						
木本花粉	142	127	217	208	209	201
草本花粉	97	88	229	197	322	356
不明花粉	9	8	9	9	16	12
シダ類胞子	305	311	213	238	189	140
総計(不明を除く)	544	526	659	643	720	697

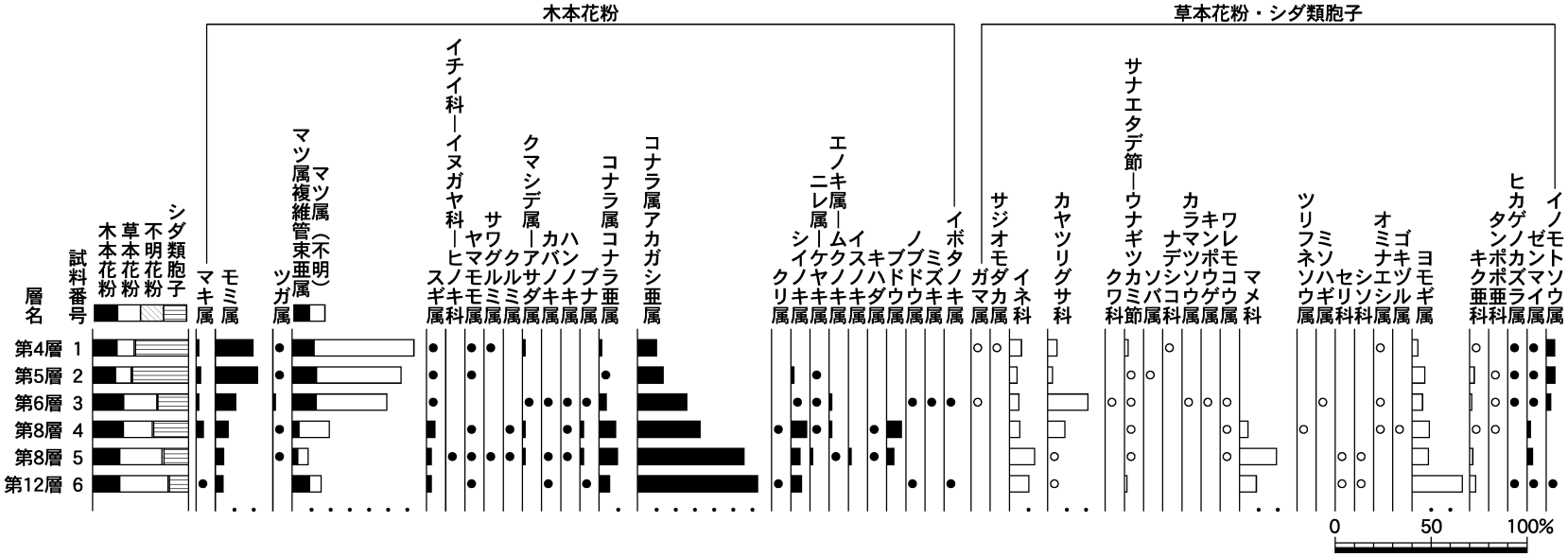
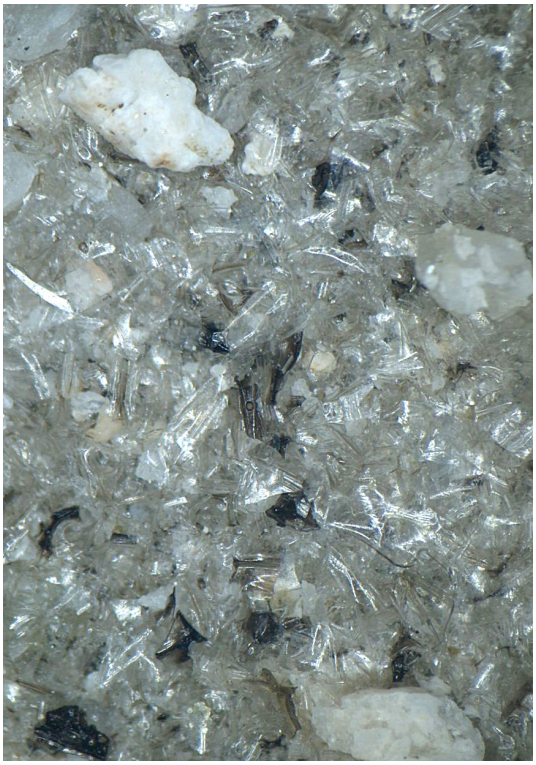


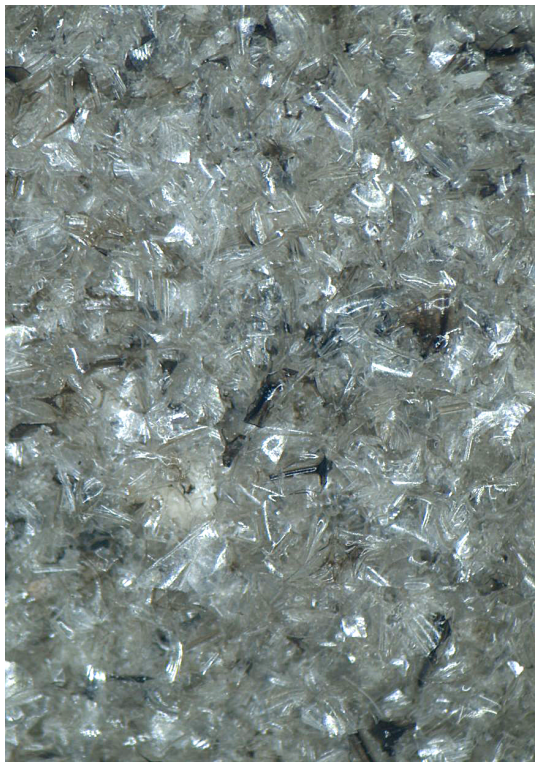
図2.　SD01における花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満を示す。

図版1　テフラ

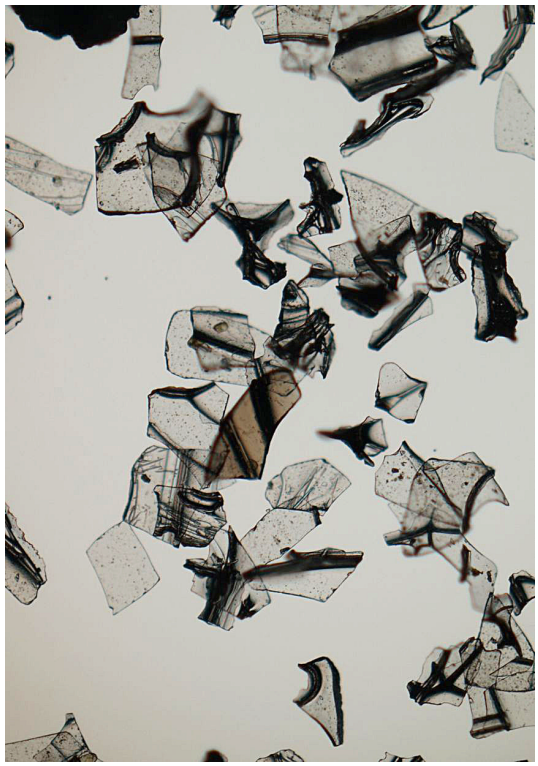


1.実体鏡下の状況(SD11ベルト1, サンプル1)



2.実体鏡下の状況(SD11ベルト2, サンプル2)

3.実体鏡下の状況(SD11南壁, サンプル3)

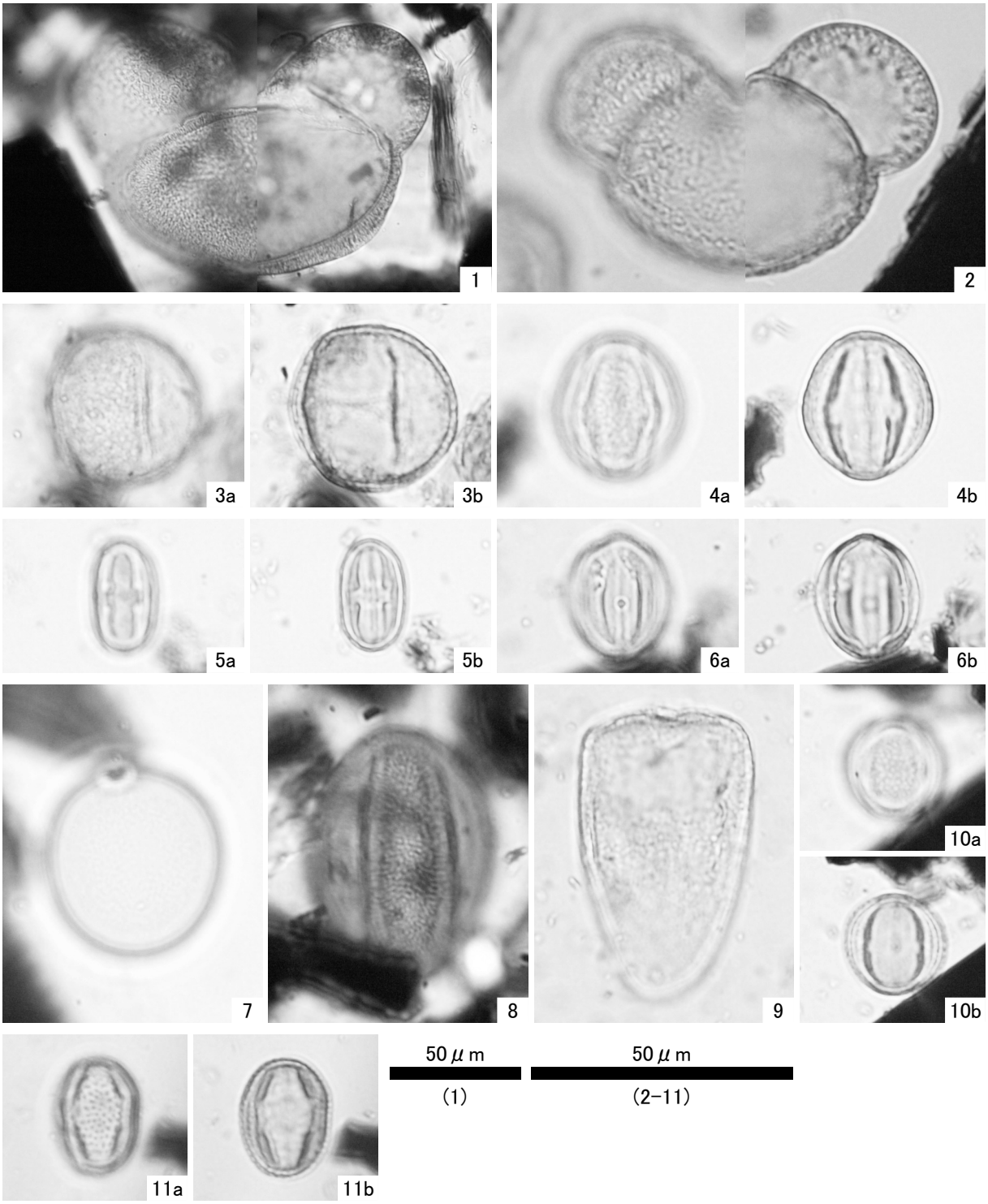


4.K-Ahの火山ガラス(SD11ベルト1, サンプル1)

2.0mm　(1-3)

0.5mm　(4)

図版2　花粉化石



1．モミ属(SD01;第6層 3)
2．マツ属(SD01;第8層 5)
3．コナラ属コナラ亜属(SD01;第8層 4)
4．コナラ属アカガシ亜属(SD01;第8層 5)
5．シイノキ属(SD01;第8層 5)
6．ブドウ属(SD01;第8層 4)
7．イネ科(SD01;第8層 5)
8．ソバ属(SD01;第5層 2)
9．カヤツリグサ科(SD01;第6層 3)
10．ヨモギ属(SD01;第8層 4)
11．マメ科(SD01;第8層 4)

5. まとめ (Fig.8～10、PL.1)

調査で確認した遺構は縄文時代と古代の2時期に分かれる。縄文時代は川跡・自然流路・小溝など、古代は条里地割に沿う直線的な溝1条である。第2次調査で確認した遺構・遺物は南側の第1次調査区に比べて少なく、野芥大藪遺跡の中心からはずれた地点に当るものと思われる。縄文時代と思われる川跡は遺物の出土はほとんどないが、第1次調査の成果から推定した。SD01出土流木の年代測定は3,180±30BPを示す。流木で遺構の時期を判断するのは難しいが、ひとつの目安となろう。また下層基盤面で検出したSD11はテフラで埋没しており、土壌の自然科学分析を委託して行った結果、暦年代が7,300年前の鬼界アカホヤ火山灰であることが判明した。アカホヤ火山灰は野芥大藪遺跡西側の免遺跡第2次調査でも確認されており、アカホヤ火山灰を挟んだ上下の層から削器や石匙などの石器類とナイフ形石器などが出土している。報告書ではナイフ形石器以外は縄文時代前期前半のものとしている(註１)。早良平野内陸部の沖積地には火山灰層が比較的良好に残り、遺構・遺物が遺存している可能性があり、今後注意を要する。古代のSD04は古代早良郡の条里地割(N-10°-W)に沿うものであり、第1次調査のSD19から直線的に続く水路である。確認長は約100mに及ぶが、上層に12世紀代の中国産白磁が出土しており、中世前半代には埋没していた可能性がある。第1次調査では堰が検出されており、SD04の両側に水田が展開していたと思われる（註２）。

さて最後に余談であるが、調査中近くの人から「椿川」を知っているかという質問を受けた。地元の小学校などで郷土の故事として話していることであった。また地下鉄野芥駅のシンボルマークの椿はこの故事に由来する。「椿川」は室見川東側の早良平野中央部から東側を潤す水路である。室見川上流の一ツ家の椿井堰から取水し、入部小学校の北端で金屑川に合流して流れ、荒江あたりまで潅漑する。早良平野を流れる各水路で最も広い灌水面積を持つ。江戸時代の開削された時期は不明であるが、水量の乏しい金屑川や油山川の流路に水を供給するために、早良平野の水路を利用する中下流の人々が多大な苦労をして水路を開き、年々の補修を行っていたということである(註３)。

註1　福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告-2-　福岡市埋蔵文化財調査報告書第536集　1997

註2　福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告-4-　福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集　1998

註3　福岡地方史研究会会員の首藤卓茂氏からご教示を受けた。

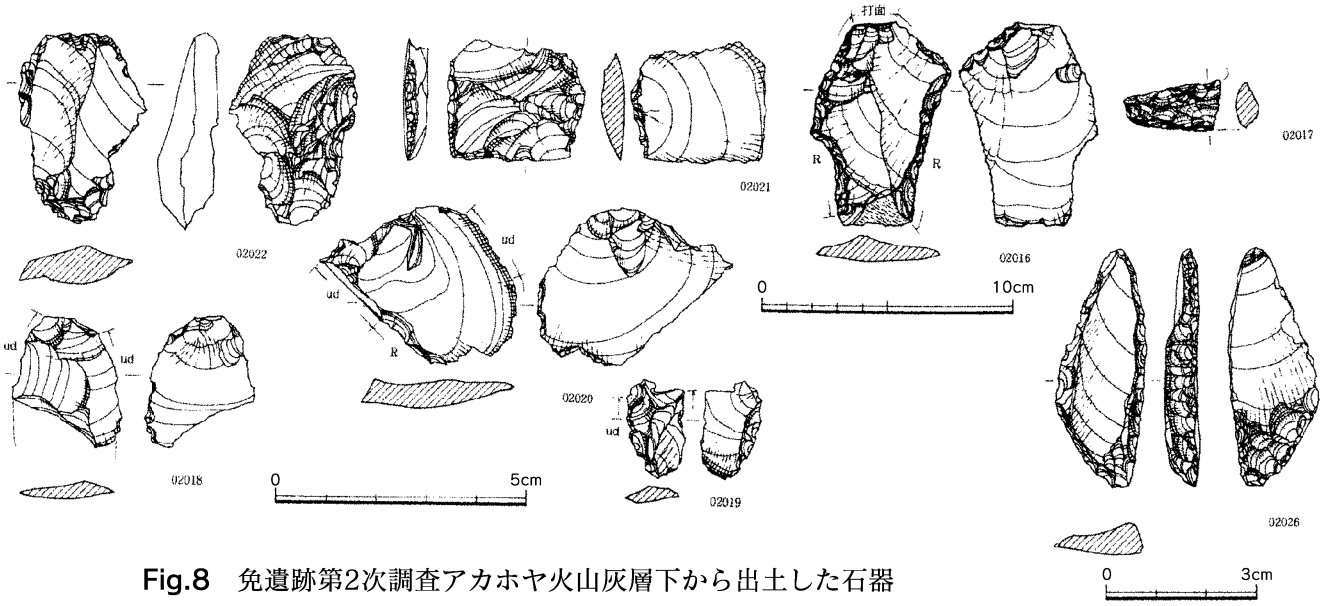


Fig.8　免遺跡第2次調査アカホヤ火山灰層下から出土した石器

Fig.9　第1次調査・第2次調査遺構配置図（1/750）

1　原10次
2　有田3次・51次
3　田村7次
4　野芥大藪遺跡

「原遺跡3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第215集の図にドットを添付

Fig.10　早良平野条里図

野芥大藪遺跡周辺航空写真（昭和23年米軍撮影）

PL. 2

(1) 野芥大藪遺跡航空写真（1994年撮影）

(2) 第1次調査Ⅰ区遺構写真

(1) 調査区から油山を臨む（北西から）

(2) 調査区全景（上から）

PL. 4

(1) 調査区西側（上から）

(2) 調査区東側（上から）

(1) SD01（北西から）

(2) 同　中央土層（南から）

(3) 同　南壁土層（北から）

PL. 6

(1) SD02・05・11（南から）

(2) SD02北壁土層（南から）

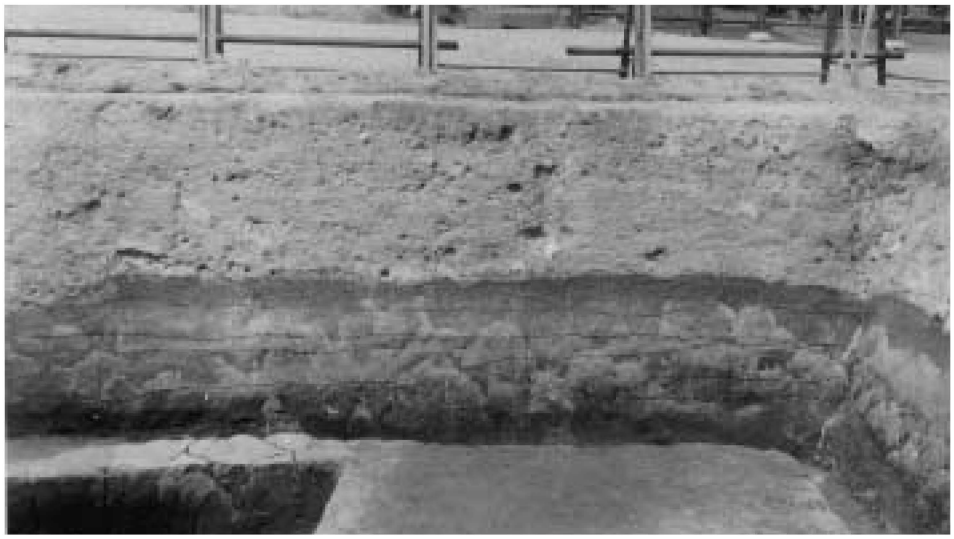
(1) SD04（南から）

(2) 同　土層（南から）

PL. 8

(1) SD07（北西から）

(2) 調査区中央部第2面検出状況（北東から）



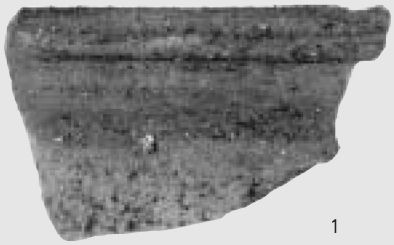
(1) 調査区西壁土層（東から）

(2) 南壁土層（北から）

(3) 発掘調査を行った人たち

PL. 10

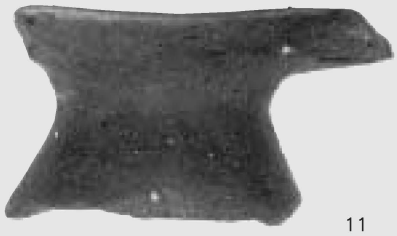
SD02



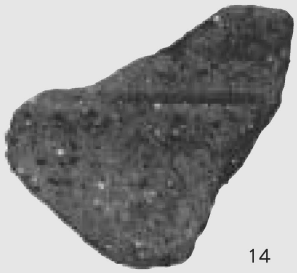
1

SD04

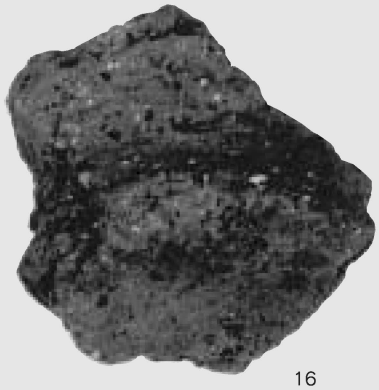
10



11

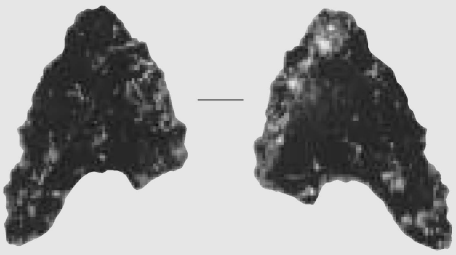


14



16

遺構面



17

各遺構出土遺物（縮尺不統一）

－報告書抄録－

ふ り が な	のけおおやぶ
書　　名	野芥大藪２
副 書 名	野芥大藪遺跡第２次調査報告
巻　　次	2
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1085
編 著 者 名	山崎龍雄
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8621　福岡市中央区天神１丁目8－１　TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2010年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のけおおやぶいせき 野芥大藪遺跡 第2次調査	ふくおかし さわらく かもにちょうめ 福岡市早良区賀茂2丁目 100－1外1筆	40130	2448	33度 34分 50秒	130度 25分 43秒	20080410～ 20080606	546.70	市営住宅 建替

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野芥大藪遺跡 第2次調査	川　跡	縄文時代、古代	縄文時代:川跡＋古代:条里水路	縄文土器･石器＋古墳時代土師器･須恵器＋古代土師器･須恵器＋中世中国産青磁	アカホヤ火山灰

要　　約	縄文時代と思われる川跡と古代早良郡の条里地割に合った水路を検出。この水路は第1次調査から続くものである。基盤面の調査でアカホヤ火山灰で埋まった自然流路を検出した。

野芥大藪遺跡第2次調査報告

野 芥 大 藪 2

－福岡市埋蔵文化財調査報告書第1085集－

2010年（平成22年）3月23日

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8－1
☎ 092（711）4667

印　刷　友盟社印刷有限会社
福岡市南区那の川1－13－16